柏崎小

主体的に学び合う柏っ子の育成

～問いの意識と変容を促す授業づくりの工夫～（２年計画の２年次）

校長　　南舘　義孝

１　研究主題について

本校では、教育目標に「夢をもち　自分を育てる柏の子」を掲げ、発達の段階や個性に応じて「夢」をもち、自分の心の中の「三本の苗木：やる気・根気・勇気」を育て広げる教育を行っている。昨年度より研究主題を「主体的に学ぶ柏っ子の育成」から「主体的に学び合う柏っ子の育成」とし、共同的な学びをより深め、日常の授業改善を繰り返しながら子どもを育てる取組を行っていくものとした。

昨年度の校内研究では、「主体的に学ぶ」姿を追究するため、学習問題の設定と自分の立場（考え）を明らかにした上で、授業に取り組む児童の姿を共有することにした。また、個で考えを収束させるのではなく、「学び合い」を経て多様な考えに触れ、自分の考えを見つめ直す「変容」の姿についても明らかにすることとし、本主題及び副題を設定した。

今年度は授業研究について、対象とする教科を制限せず、より広い教科・領域で主体的に学び合い、変容する姿を明らかにすること、そのための手立てについて研究することとした。そのために、「問いの意識」を大切にすることを継続しつつ、授業の中での問い・思考・立場の変化を意識しながら問題解決に向かわせ、より「学び合う」場の工夫に焦点を当てた授業実践を行うようにした。また、「変容」について、立場や意見そのものが変わらなくても、他者の意見を踏まえたり、納得したりした上で、考えが広がったり深まったりすることについて共通理解を図った。そして参観者全員で児童の姿を見取ることで、授業の中での変容がどのようなものであるのか、また、どのような場面や教師の働きかけによって起こるのかに着目し、検討することにした。

２　研究のねらい

児童が主体的に学びに向かっていくための問いや効果的な学び合いの在り方を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童の追究意欲を喚起する課題設定や、人や教材と向き合う場面を取り入れることにより、主体的に学ぶ児童を育てることができると考える。

４　研究内容

(1) 問いの意識を大事にした働きかけの工夫

ア　問いを生み出す発問の仕方・教材提示の工夫

イ　児童にとって必要感のある課題設定（問いの共有）

(2) 人や教材と関わり、一人一人の変容を促す「学び合い」の工夫

ア　考えを広げたり、深めたりするための人や教材と向き合う工夫

イ　変容を自覚するための手立て

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等
6	22	国語科（２学年）「あったらいいな、こんなもの」／教諭　八嶋　麻里 道徳科（４学年）「良 太 の は ん だ ん」／教諭　小笠原梨夏 算数科（５学年）「図を使って考えよう」／教諭　尾崎真理子 （初任者研修示範授業を兼ねる）
7	13	教育指導課訪問
7	19	授業研究（６学年）音楽科「ききどころを見つけて」／教諭　畑中　裕子
9	6	授業研究（３学年）社会科「買い物調べ」／教諭　古川　千晶
11	1	授業研究（１学年）体育科「ボールけりゲーム」／教諭　在家真奈美
11	21	小・中学校ジョイントスクール（３～６学年授業公開）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
6	14	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり 講師：子ども支援センター　小堀　祐二　主任指導主事
8	31	県学習状況調査の採点・分析・考察
10	25	問題解決的な学習を促す「問い返し」の共有 ファシリテーター：本校研修主任　下村　亘
11	15	体育指導に関する研修 講師：本校校長　南舘　義孝

６　研究の成果

(1) 児童は、問いを生み出す発問や教材提示などの手立てにより、「解決したい」「解決しよう」という思いをもって授業に臨むことができた。「〇〇を考えよう」といった学習課題だけではなく、「なぜ」「どちらが」「どうすれば」といった、思考を焦点化した学習課題を設定することにより、主体的な学び・考えを広げたり深めたりすることにつながった。また、試行錯誤の時間と他者と関わる場を確保することで、一人一人の思考を促し、児童の思考が変容する様子が見られた。

(2) 昨年度は２教科（国語科・算数科）の授業研究であったが、今年度は６教科の授業研究を行った。幅広い教科で「学び合い」の事実を見取ることができた。児童は単なる意見交換ではなく、考えを検討したり、話合いによって深めたりする「学び合い」に向かうことができた。また、研究の中で考えを深めさせる「問い返し」の重要性を認識し、指導者全員で「問い返し」の言葉を共有する機会を設けることで、研修の日常化につながった。

７　研究の課題

(1) 教科や発達の段階に応じた「学び合い」の方向性について共通理解を図りながら、具体的な単元や場面において追究を継続していく必要がある。

(2) 意欲や学力において個人差が見られるため、一人一人の追究意欲を喚起する問いや評価の仕方・ＩＣＴの活用など、個別最適な学び・協働的な学びについて理解を深めていく必要がある。

（記入者　下村　亘）